

# 「敬語の指針」をめぐって

磯部佳宏

## 1 はじめに

平成19年2月に、文化審議会答申として「敬語の指針」が発表された。これは、本答申の「はじめに」でも述べているとおり、国語審議会が過去に建議・答申した昭和27年4月の「これからの敬語」（建議）と平成12年12月の「現代社会における敬意表現」（答申）の内容を踏まえたうえで作成されたものである。過去の建議・答申が概括的で基本方針のみを示したものであるという印象があるのに対して、今回の答申は第1章「敬語についての考え方」で敬語についての基本的な認識や留意すべき事項について概説したうえで、第2章「敬語の仕組み」において敬語の種類と働きについて解説し、実際の敬語の形を実例をあげながら説明し、さらに第3章「敬語の具体的な使い方」では敬語の使い方に関する具体的な疑問や問題点を設定し、Q&Aのかたちで解説を加えるという構成となっており、参考資料等も含めると全77ページからなる大部のものである。

本答申は、＜答申の構成と性格＞において「学校教育や社会教育での敬語の学習や指導」「地域・職場・家庭など様々な社会生活での敬語使用等」の「よりどころ」の基盤として活用されることを期待すると述べているように、今後、国語教育や日本語教育などの教育現場における敬語指導の指標となるだけでなく、職場や店舗などにおいて敬語マニュアルとして使用されたり、だれが読んでもわかりやすくまとめられているので、広く社会に浸透し、国民一人一人が日本語の敬語の性格と仕組みについて再認識する契機となることが望まれる。

## 2 本答申への疑問点や意見

しかしながら、本答申を通読すると、やや説明不足ではないかと感じられる箇所や、疑問の残る点もないわけではない。もっとも、本答申は敬語研究の専門書ではないので、一般に馴染みのない専門用語の使用や個々の学者による見解の相違について細かく取り上げ解説するようなことが避けられているのは当然であるし、＜答申の立場＞において「敬語の歴史的な背景についての扱い」として「現代の敬語について、その由来や原義を踏まえて理解することは、それ自体有益なことであるが、本答申はその観点からの解説に立ち入ることを本旨としていない」と述べているように、敬語

の歴史的変化や歴史的 position 付けについての説明が時として不十分に感じられるのも致し方のないことではあろう。

以下、本答申のとくに特徴的な諸点を取り上げながら、解説を加えつつ、筆者自身の疑問点や意見などを述べていきたい。

## 2-1 敬語の種類

本答申の最大の特徴としてあげられるのは、敬語を「尊敬語」「謙譲語Ⅰ」「謙譲語Ⅱ（丁寧語）」「丁寧語」「美化語」の5種類に分けて解説している点である。この5分類は日本語学の分野ではすでに広く浸透しているものであるが、従来の学校教育では「尊敬語」「謙譲語」「丁寧語」の3分類が広く使用されており、多くの人々にとってこの5分類はこれまで馴染みのないものであろう。もっとも、〈答申の立場〉の「敬語の区分について」で述べられているとおり、この5分類は「従来の学校教育等で行われる3種類に分ける考え方と対立するものではない」のであり、「謙譲語として一括されている語群を「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ」の2群に、また丁寧語としてまとめられている語群を「丁寧語」と「美化語」の2群に、それぞれ分けしたもので、従来の考え方に基づいたもの」である。したがって、本答申では今回の5分類の仕組みを従来の3分類に基づいて解説しており、高校までの国語教育において十分に敬語について学び理解できている人々には有効である。しかし、実際には国民の多くは、従来の3分類の原理についても十分に理解していないのが実情ではないかと思われる。すなわち、文字面から「謙譲語」を「話し手が遜る言葉」、「丁寧語」を「丁寧な言葉遣い」のように理解し、「尊敬語」だけが「敬語」であるくらいにしか認識していないようなケースさえ珍しくないように思われる。

### 2-1-1 「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ（丁寧語）」

本答申では、「謙譲語Ⅰ」を「何う・申し上げる」型とし、「自分側から相手側又は第三者に向かう行為・ものごとなどについて、その向かう先の人物を立てて述べるもの」と定義付けるのに対し、「謙譲語Ⅱ（丁寧語）」を「参る・申す」型として「自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの」と定義付けている。すなわち、「参る」や「申す」は完全に「謙譲語Ⅱ（丁寧語）」の動詞と考え、「謙譲語Ⅰ」としての性格は認めていない。実際に「参る」についての解説で、次のような例を挙げている。加藤先生に向かって、「明日は、田中先生のところに参加します。」と言った場合、田中先生を立てることはできないとし、この場合は「加藤先生に対して丁寧に述べたもので、田中先生を立てているわけではない」とし

て、この文中の「田中先生」を「弟」に入れ替えて「弟のところへ参ります。」のように使用できることを証拠としてあげている。したがって、田中先生を立てるためには「田中先生のところへ伺います。」としなければならないという説明である。

規範としては、非常にわかりやすい説明であろう。しかしながら、現代語の「参る」には「謙譲語Ⅰ」としての性格はまったくないと言い切ってしまうて本当によいのであろうか。古典文法を勉強した人であれば周知のごとく、いうまでもなく「参る」は歴史を遡れば本来は純然たる「謙譲語Ⅰ」の動詞である。それが時代が降るにつれ、敬意が低下し、敬意の対象が曖昧になることによって「謙譲語Ⅱ（丁重語）」化したものである。『日本国語大辞典 第二版』における「参る」の項でも「一 「行く」の謙譲語で行く先方を敬う。」「二 一の「行く先」を敬う性質が失せ、丁重・荘重にいうのに用いられるようになったもの。」と説明している。一般に二の用法が広く認められるようになるのは中世以降である。しかし、同時に一の用法を全く失ってしまったのではない。一と二の用法が並行して使用されていたのである。もちろん、「参る」の用法が一から二へと徐々に変化して行ったために、一の用法としては「伺う」が新たに使用されるようになったわけである。「伺う」もその語形自体は古くから存在するが、「訪問する」の意味の「謙譲語Ⅰ」として一般的に使用されるようになったのは『日本国語大辞典 第二版』によれば近代になってからのようである。

一般に「敬語」は永い時代使用されていくうちに敬意が下がっていく。「敬意通減の法則」と呼ばれる現象である。そしてある語の敬意が下がると、より敬意の高いそれに代わる語が新たに求められ使用されるようになるのが普通である。「参る」と「伺う」もその関係にある。たしかに、現代語の「参る」は二の用法が中心であることは疑いないが、「伺う」よりは敬意の低い「謙譲語Ⅰ」の動詞として使用される可能性も皆無とはいえないのではないか。つまり、さきほどの例で「田中先生」に高い敬意を示そうとするのであれば当然「伺う」を使用すべきであるが、「田中先生」も「加藤先生」の教え子であるというような場合、話し手は二人の先生の間を配慮して「伺う」を使用したのでは「加藤先生」に対する敬意が十分に表せないと考え、「参る」を「伺う」よりは敬意の低い「謙譲語Ⅰ」の動詞と位置付け、「参る」のほうを選択するという場合もあるのではないか。

同様に、「申す」と「申し上げる」についても、本答申では前者を「謙譲語Ⅱ（丁重語）」、後者を「謙譲語Ⅰ」と峻別する。しかし、たとえば課長である話し手が社長に対して「私が部長にそのように申します」と言った場合、一般的には部長に対する敬意は存在しないとみるのが普通であろうが、話し手は部長に対する敬意も示した

いと考へながらも社長と部長との社内での上下関係を考へ、敬意の高い「申し上げる」を避け、より敬意の低い「謙讓語Ⅰ」として「申す」を使用したと考へる余地もあるのではないか。

「存じる」と「存じ上げる」の場合も、本答申の考へ方では前者は「謙讓語Ⅱ（丁重語）」、後者は「謙讓語Ⅰ」として峻別されることとなるが、たとえば話し手である課長が部長に対して「私は社長の奥様は存じません」と言った場合、社長の奥様に対する敬意も必要であるとは考へるが、その場に存在しない社長の奥様と眼前の部長とに示すべき敬意の度合いを配慮し、「存じ上げる」よりは敬意の低い「謙讓語Ⅰ」の動詞として「存じる」を使用したとも考へられるのではあるまいか。

もちろん、規範としては動作の向かう先の人物を立てる場合には「伺う」「申し上げる」「存じ上げる」を使用すべきであると説明するのは当然である。現代語においては「参る」「申す」「存じる」に相手に対して丁重に述べるという「謙讓語Ⅱ（丁重語）」の用法が確立している以上、もし話し手がこれらの語を「伺う」「申し上げる」「存じ上げる」より敬意の低い「謙讓語Ⅰ」の動詞のつもりで使用したとしても、聞き手が「謙讓語Ⅱ（丁重語）」として理解したのでは円滑なコミュニケーションが阻害されることとなるからである。しかしながら、歴史的な背景を踏まえると現代語の「参る」「申す」「存じる」にも「謙讓語Ⅰ」の用法が完全に払拭されているとは強ち言い切れないのではないか。すくなくとも、本答申においても、そのあたりの歴史的な事情については少し触れておいたほうがよいのではないだろうか。

また現代語では「参る」「申す」「存じる」は一般に丁寧語「ます」と一体化して使用されることが普通であることから、これらの語が完全に「謙讓語Ⅱ（丁重語）」化してしまつたと説明されることが多い。しかし、「私が部長にそのように申したいと存じます」のように、「申す」を単独で使用する場合もないわけではない。また、本答申の「敬語の形」の「動詞の謙讓語Ⅰ」の「一般形の主な例」では「お（ご）……する」「お（ご）……申し上げます」「……ていただく」「お（ご）……いただく」の4種類を掲げるのみで、「お（ご）……申す」の形は示されていないが、実際には例えば話し手が聞き手である部長に対して「私が社長にそのようにご報告申します」のように使用する場合もなくはないだろう。この例では、「ご報告申し上げます」と同様に社長に対する敬意を表していると考えるのが自然で、話し手はその場に存在しない社長と眼前の部長との関係を考慮したうえでより敬意の軽い「ご報告申します」のほうを選択したと考へられるのではないだろうか。

さらに、「申し出る」「申し込む」のように「申す」は複合動詞として使用される場合が現代語においても少なからず存在する。これらについては、現代語の国語辞典

においても「申し出る」「申し入れる」「申し合わせる」「申し送る」「申し越す」「申し立てる」「申し付ける」「申し込む」などの複合語には、謙譲や丁寧の意味はない」（『新選国語辞典 第八版』）のように「申す」の謙譲語としての性格を完全に否定しているものがある一方で、「申し出る」についての語釈で「自分にそういう意志・意見や希望・要求が有ることを△目上の人（当局者）に正式に伝達する」（『新明解国語辞典 第六版』）として、△付きながら「目上の人」という語によって、「申し出る」の謙譲語としての性格を否定していないと考えられるものもみられる。本答申においても、「ご持参ください」、「お申し出ください」、「お申し込みください」などといった表現のなかに含まれる「参る」や「申す」は、謙譲語Ⅱとしての働きは持っていないと言ってよい」としながらも「ご持参ください」「お申し出ください」という表現が気になる場合には、「お持ちください」「おっしゃってください」などと言い換えれば良い」と述べて、これらの「参る」や「申す」に敬語としての意識が残存している可能性を否定し去ってはいない。筆者など、「申し出る」の場合、たとえば店員が客に対して「ご希望の方は申し出てください」などと使用するのには抵抗がある。

## 2-1-2 「丁寧語」と「美化語」

前述のように、本答申では最初に「丁寧語」と「美化語」の関係について、「従来の学校教育等」で「丁寧語としてまとめられている語群を「丁寧語」と「美化語」の2群」に区分けしたものと説明したうえで、「丁寧語」は「話や文章の相手に対して丁寧に述べるもの」、「美化語」は「ものごとを、美化して述べるもの」と定義付けている。そして、美化語については、「前述の1～4で述べた狭い意味での敬語とは、性質の異なるものである」と述べ、「だが、＜行為者＞＜向かう先＞＜相手＞などに配慮して述べるときには、このような言い方が表れやすくなる」として「こうした点から、広い意味では、敬語と位置付けることができるものである」と結論付けている。ただ、たとえば「どこに住んでいるの?」「あとで行くよ」を目上の人に対して使用する場合には「どちらにお住まいですか?」「のちほど参ります」となるのが普通であるが、この場合「住んでいるの?」が「お住まいですか」と尊敬語+丁寧語になり、「行くよ」が「参ります」と謙譲語Ⅱ+丁寧語になると同時に、「どこ」が「どちら」に、「あとで」が「のちほど」に置き替わるのが一般的である。このような「どちら」「のちほど」などを「準敬語」と呼ぶ立場もあるが、本答申の美化語の解説ではこの準敬語との区別が明確ではないのではなかろうか。

敬語を、話し手が話題のなかの人物に関しての上下関係を示す「素材敬語」と聞き

手に対する直接的な敬意を示す「対者敬語」とに二大別した場合、従来の三分類の「丁寧語」のうち、後者に相当するものを「丁寧語」とし、前者と考えるべきものを「美化語」とすると説明したほうがすっきりするのではないだろうか。

## 2-2 「二重敬語」と「敬語連結」

本答申では「二つ以上の種類の敬語にわたる問題」として「二重敬語」と「敬語連結」について、具体例を挙げながらその適否について解説している。

### 2-2-1 「二重敬語」

本答申では、「二重敬語」について、次のように定義付けている。

一つの語について、同じ種類の敬語を二重に使ったものを「二重敬語」という。

例えば、「お読みになられる」は、「読む」を「お読みになる」と尊敬語にした上で、更に尊敬語の「……れる」を加えたもので、二重敬語である。

そして、「二重敬語」は、一般に適切ではないとされている」としているが、「適切ではない」理由についてはとくに解説を加えていない。さらに、「語によっては、習慣として定着しているものもある」としたうえで、

[習慣として定着している二重敬語の例]

- ・（尊敬語） お召し上がりになる、お見えになる
- ・（謙譲語Ⅰ） お伺いする、お伺いいたす、お伺い申し上げる

と、実例を示している。

この説明によると、「お（ご）……になる」のような文法形式（本答申では「一般形」と呼ぶ）にさらに尊敬の助動詞「れる」が添加するような形は二重敬語として避けるべきであるが、「召し上がる」「見える」のような敬語動詞（本答申では「特定形」と呼ぶ）と「一般形」との二重敬語については、実際に使用されているものは、すべて「習慣として定着している」として容認していることとなる。つまり、尊敬語の特定形の主な例として本答申に挙がっている「いらっしゃる」「おっしゃる」「なさる」「召し上がる」「下さる」「見える」のうち、そもそも一般形と結びつく可能性があるのは「召し上がる」と「見える」のみである。「おなさりになる」とか「お下さりになる」などとはまず使わない。同様に、謙譲語Ⅰの特定形の主な例として本答申に挙がっている「伺う」「申し上げる」「存じ上げる」「差し上げる」「頂く」「お目に掛かる」「お目に掛ける」「御覧に入れる」「拝見する」「拝借する」のうち、そもそも「お（ご）……する」のような一般形と結びつく可能性があるのは「伺う」だけであり、「お申し上げする」「お頂きする」などとは絶対に使わな

い。謙讓語Ⅱ（丁重語）の特定形の主な例として本答申に挙がっている「参る」「申す」「いたす」「おる」「存じる」についても、いずれも「お（ご）……する」のような一般形とはもともと結びつかない。もちろん「参る」のみは「お参りする」の形で使用するが「神社・仏閣に参詣する」という特殊な意味の場合に限られる。

こうした本答申の二重敬語の扱いについては、もう少し詳しい解説があって然るべきように思う。敬語を使用する者の意識としては、より丁寧により敬意の高い敬語を使用しようとする欲求が常に働くものであり、従来使用している敬語と異なった語形が求められるようになること。その結果、実際にあらゆる敬語は時代とともに敬意が下がってしまうこと。二重敬語もそうした流れのなか使用されるものであるが、現時点においては一般に二重敬語はむしろ「敬語の使いすぎ」「過剰敬語」「馬鹿丁寧」「慇懃無礼」などと感じられる危険性があること。しかし、将来的には敬意の逡減により、二重敬語が適正なレベルの敬語と感じられるようになる可能性は否定できないこと。

本答申が「習慣として定着している」と認めている二重敬語の形についても、現時点における敬意の度合いは一樣ではない。「お見えになる」は適正なレベルだと思われる。つまり「見える」は単独の敬語動詞としては敬意が低く、例えば「お客さまが見えました」と言った時、客がその場にはいない取次の場合ではよいが、客の眼前では敬意が低すぎて客に失礼なように感じられる。これに比べると、「召し上がる」は単独でも現時点において十分な敬意を持っていると思われ、例えば「部長は何を召し上がりますか？」と直接目上の人に使用しても、決して失礼なレベルではない。したがって、「お召し上がりになる」は過剰敬語とも考えられる。なお、本答申では「お召しになる」が「変則的な「お（ご）……になる」]として「着る」の尊敬語の形として挙げられているが、歴史を遡ると「召す」単独で「着る」の尊敬語の敬語動詞として使用されていたものであり、その意味では形式的には一種の二重敬語である。しかし「召す」の敬意の低下により現代語では普通「お召しになる」の形でしか使用しないものとなっている。

「伺う」の場合も、たとえば「明日の午後、お宅へ伺います」と直接目上の人に使用したとしても決して失礼ではなく、「伺う」単独で十分に高いレベルの敬意を持っていると考えられる。前述のように、本答申では、この「伺う」が一般形の「お（ご）……する」「お（ご）……いたす」「お（ご）……申し上げる」のいずれと共に使用された場合でも「習慣として定着している」と認めているが、この3つの形式もそれぞれ敬意の度合いが異なっており、「お伺い申し上げる」などは明らかに敬語の使いすぎ、過剰敬語と考えられるレベルなのではないだろうか。

## 2-2-2 「敬語連結」

本答申では、「敬語連結」について、次のように定義付けている。

二つ（以上）の語をそれぞれ敬語にして、接続助詞「て」でつなげたものは、上  
で言う「二重敬語」ではない。このようなものを、ここでは「敬語連結」と呼ぶ  
ことにする。

そのうえで、「敬語連結」は、多少の冗長感が生じる場合もあるが、個々の敬語の  
使い方が適切であり、かつ敬語同士の結び付きに意味的な不合理がない限りは、基本  
的に許容されるものである」という見解を示している。そして、「許容される敬語連  
結の例」として「お読みになっていらっしゃる」「お読みになってくださる」「お読  
みになっていただく」「御案内してさしあげる」の4例を挙げ、「不適切な敬語連結  
の例」として挙げられているのは、敬意の対象（本答申では「立てる」人物ということ  
になる）に不合理の生じる「伺ってくださる」「伺っていただく」「御案内してくだ  
さる」「御案内していただく」の4例が挙げられている。

このように、本答申では、ここでも「二重敬語」の項目と同様、敬意の高さのレベ  
ルという観点からの解説はない。「多少の冗長感」と述べるだけで、「敬語連結」が  
時として「敬語の使いすぎ」「過剰敬語」「馬鹿丁寧」「慇懃無礼」という印象を与  
える危険性もありえることについての言及は全くない。また、たとえば、「許容され  
る敬語連結の例」として挙げられている「お読みになってくださる」や「御案内してさ  
しあげる」の場合、敬語を一つとして「読んでくださる」「案内してさしあげる」は  
自然だが「お読みになってくれる」や「御案内してやる」は不適切で、一般に後半の  
語を敬語とするのが普通であるというような説明もあってよいのではなかろうか。な  
お、「許容される敬語連結の例」として挙げられている「お読みになっていただく」  
は、たしかに敬語同士の結び付きに意味的な不合理はないが、実際にはかなり不自然  
に聞こえるのではあるまいか。

## 2-3 その他

Q&Aの形式で解説を進めている第3章のなかで、次のような問題についてはより  
詳しい説明があるとさらに良いように思われる。

### 2-3-1 「お分かりにくい」「お読みやすい」

「「分かりにくい」や「読みやすい」といった言葉を尊敬語にするなら、それぞ  
れ、「お分りになりにくい」、「お読みになりやすい」とすれば良い」として、  
「動詞＋形容詞」の形を取るものを尊敬語にする場合には、動詞の部分だけを尊敬



語にすれば良い」と解説している。

この説明自体は明快なものだが、「お分かりにくい」「お読みやすい」がなぜ間違いなのかという点についてのさらに詳しい解説があるとよいように思う。この形は「全商品お求めやすい価格となっております」のような「お求めやすい」の形で使用されることが多くかなり定着している。「お求めやすい」は「社長の奥様はお美しい方です」の「お美しい」のように形容詞の尊敬語の形式で、商品に対する敬意を表すことになってしまうため誤りであるという理由をはっきりと示したほうが良いように思う。

### 2-3-2 「いただく」と「くださる」

本答申では「御利用いただく」と「御利用くださる」を比較し、前者は謙譲語Ⅰで後者は尊敬語であるが、「立てるべき対象は、どちらも同じであり、また、恩恵を受けるという認識を表す点も同様であるため、どちらの言い方も適切に敬語が用いられているものである」としながらも、「謙譲語Ⅰの「御利用いただく」の使い方には、問題があると感じている人たちもいる。その理由としては、「利用する」のは相手側や第三者なのだから、尊敬語である「御利用くださる」を使うべきだということなどが挙げられているようである」と解説している。

しかし、「御利用いただく」形式に違和感が感じられる場合というのは、「御利用いただく」形式自体に問題があるというよりも、「お一人でもお気軽に御利用いただけます」のように、可能の形で使用された場合ではないだろうか。この形も実際には広く使用されており、筆者はすでに許容されていると認めてよいと考えるが、相手が「利用できる」ことを表現するために「利用してもらう」側を主体として可能表現とするのは、理論的に若干抵抗が感じられる点は否定できないように思われる。

## 3 アンケート調査の結果と分析

以上のような、本答申の内容や説明に対する問題点や疑問点を踏まえたうえで、アンケートを作成し調査を実施した。調査は筆者が担当する次の二つの授業の受講学生を対象に行なった。

A 日本語史（人文学部専門科目）

B 言語学（共通教育科目）

Aは人文学部の二～四年生対象の授業で、アンケートは2007年10月24日の授業中に実施し74名の回答を得た。この授業は、後期は「待遇表現史」をテーマに進めてお

り、前週までに敬語の5分類の解説も終えている。

Bは全学部の主として1年生が対象の授業で、アンケートは2007年10月18日の授業中に実施し152名の回答を得た。この授業は、後期、「戦後の国語改革」を中心テーマとして進めているが、アンケート実施まで敬語に関する講義は行っていない。

アンケート用紙は、別添資料として論文末に示す。

以下、アンケートの結果を示しながら、分析および考察を進めていく。

### 3-1 「二重敬語」と「敬語連結」

#### 3-1-1 「二重敬語」

問1の①～④は「二重敬語」に関する質問である。AクラスとBクラスに分けて、結果を示す。

①	A	ア	28名 (37.8%)	B	ア	55名 (36.2%)
		イ	25名 (33.8%)		イ	63名 (41.4%)
		ウ	21名 (28.4%)		ウ	34名 (22.4%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

②	A	ア	1名 (1.4%)	B	ア	4名 (2.6%)
		イ	67名 (90.5%)		イ	117名 (77.0%)
		ウ	6名 (8.1%)		ウ	30名 (19.7%)
					無回答	1名 (0.7%)
	計	74名 (100%)	計	152名 (100%)		

③	A	ア	2名 (2.7%)	B	ア	5名 (3.3%)
		イ	55名 (74.3%)		イ	94名 (61.8%)
		ウ	16名 (21.6%)		ウ	53名 (34.9%)
		無回答	1名 (1.4%)			
	計	74名 (100%)	計	152名 (100%)		

④	A	ア	27名 (36.5%)	B	ア	30名 (19.7%)
		イ	13名 (17.6%)		イ	43名 (28.3%)
		ウ	32名 (43.2%)		ウ	78名 (51.3%)

エ 2名 (2.7%)  
計 74名 (100%)

エ 1名 (0.7%)  
計 152名 (100%)

①の「お召し上がりになる」は本答申では「習慣として定着している二重敬語」のうち尊敬語として認めているものであるが、「召し上がる」は、前述のように単独でも十分な敬意を持っており、「お召し上がりになる」はやや敬語の使い過ぎではないかと感じられるものである。調査結果をみると、両クラスとも「ア 召し上がる」と「イ お召し上がりになる」の両形がほぼ拮抗している。「お召し上がりになる」がやや過剰敬語であるにもかかわらず、それほど抵抗なく受け入れられ、かなり定着している要因としては、「召し上がる」が一般形の「お(ご)……くださる」と共に用いられた「お召し上がりください」の形が広く使用されている点も関係しているように思われる。ただし、「お召し上がりになる」にさらに尊敬の助動詞「れる」が添加し、明らかに敬語の使い過ぎと考えられる「ウ お召し上がりになられる」も相当に支持されている点は気になる。

②の「お見えになる」も本答申で「習慣として定着している二重敬語」のうち尊敬語として認めているものであるが、前述のように「見える」単独では現時点においてはすでに十分な敬意を表せないと考えられ、「お見えになる」が適正なレベルと思われるものである。調査結果をみると、両クラスとも「イ お見えになる」が圧倒的に多く、「ア 見える」はほとんど選択されていない。これは、「見える」の場合、単独で使用すると敬意が低すぎるだけでなく、敬語動詞以外の用法も存在することも関係しているだろう。イにさらに助動詞の添加した「ウ お見えになられる」もそれほど多くないが、敬意の高さから考えると、これが「お召し上がりになる」のレベルに近いともいえる。

③の「お召しになる」は本答申では、「二重敬語」としてではなく「着る」に対応する変則的な「お(ご)……になる」形式として挙げられているものであるが、前述のように本来は「召す」は単独で尊敬語の敬語動詞として使用されていたものである。そういう意味では「イ お召しになる」は一種の二重敬語ということになる。しかし、現代語としては「ア 召している」はやはり一般的ではなく、ほとんど選択されておらず、「お召しになる」が標準的な形だといえる。

④の「何う」は謙譲語Ⅰの敬語動詞として単独でも十分な敬意を持っていると考えられるが、本答申では「お伺いする」「お伺いいたす」「お伺い申し上げる」のいずれをも「習慣として定着している二重敬語」と認めている。調査結果をみると、両クラスとも「ウ お伺いいたす」がもっとも多く選択されておりやや意外な感じがするが、謙譲語Ⅱ(丁重語)の「いたす」が使用されているのが好ましい印象を与えるの

であろうか。「エ お伺い申し上げます」は本答申では「習慣として定着している」と認めているものであるが、さすがにほとんど選択されていない。この形は敬意の高さからみると①の尊敬語の「召し上がる」の場合であれば「ウ お召し上がりになられる」レベルに匹敵すると感じられ、あきらかな過剰敬語のように思われる。

### 3-1-2 「敬語連結」

問1の⑤⑥は「敬語連結」に関する質問である。AクラスとBクラスに分けて、結果を示す。

⑤	A	ア	24名 (32.4%)	B	ア	49名 (32.2%)
		イ	7名 (9.5%)		イ	30名 (19.7%)
		ウ	43名 (58.1%)		ウ	73名 (48.0%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)
⑥	A	ア	62名 (83.8%)	B	ア	126名 (82.9%)
		イ	6名 (8.1%)		イ	15名 (9.9%)
		ウ	5名 (6.8%)		ウ	10名 (6.6%)
		無回答	1名 (1.4%)		無回答	1名 (0.7%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

⑤の「イ お読みになっていらっしゃる」は本答申では許容されている「敬語連結」であるが、一般的には過剰敬語であると思われ、両クラスとももっとも選択されていない。「ア 読んでいらっしゃる」は接続助詞「て」でつないだ後半の動詞のみを敬語としたもの、「ウ お読みになっている」は前半の動詞のみを敬語としたもので、一般的には後半の動詞を敬語にするほうが自然なはずだが、両クラスとも「ウ お読みになっている」のほうが多数選択されている。「ア 読んでいらっしゃる」は現在の状態を、「ウ お読みになっている」は過去の経験を表しているというように、文法的にそれぞれ異なった意味を表しているように受け取られるのが自然なことと関係しているのではないだろうか。

これに対して、⑥は圧倒的多数が「ア 読んでくださる」を選択している。「ウ お読みになってくれる」は明らかに不自然で、ほとんど選択されていない。本答申では許容されている「敬語連結」である「イ お読みになってくださる」も同様にほとんど選択されておらず、敬語の使い過ぎという印象が顕著なためであろう。

### 3-2 「謙譲語Ⅰ」と「謙譲語Ⅱ（丁重語）」

前述のように、本答申では、謙譲語Ⅱ（丁重語）として挙げる「参る」「申す」「存じる」に謙譲語Ⅰとしての用法を全く認めないが、筆者としては場合によっては、それぞれ「伺う」「申し上げる」「存じ上げる」よりも敬意の低い謙譲語Ⅰとして使用される可能性も否定できないのではないかと考える。聞き手との関係で、「立てる」べき動作の向かう人物に対する敬意のレベルを少し低めに押さえないという意識が話し手に働く場合があるのではないかと考えるのである。

問3の①～③はこうした点について、場面を設定して質問したものである。

①	A	a	42名 (56.8%)	B	a	43名 (28.3%)
		b	28名 (37.8%)		b	79名 (52.0%)
		c	4名 (5.4%)		c	30名 (19.7%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)
②	A	a	17名 (23.0%)	B	a	45名 (29.6%)
		b	51名 (68.9%)		b	86名 (56.6%)
		c	6名 (8.1%)		c	21名 (13.8%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)
③	A	a	27名 (36.5%)	B	a	54名 (35.5%)
		b	7名 (9.5%)		b	19名 (12.5%)
		c	39名 (52.7%)		c	78名 (51.3%)
		無回答	1名 (1.4%)		無回答	1名 (0.7%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

①の「参る」「伺う」では、規範ではbが正解ということになるが、Aクラスでは「参る」にも「謙譲語Ⅰ」の用法を認めたaのほうが多数選択されている。Bクラスはbが過半数であるがaも4分の1以上選択されている。もっともBクラスは明らかな誤りであるcも5分の1近く選択されており、敬語に関する基本的な理解が不十分な回答者もかなり含まれているのではないかと考えられる。

②の「申す」「申し上げる」は、いずれのクラスも規範として正解のbが過半数選択されている。しかし、「申す」にも「謙譲語Ⅰ」の用法を認めたaも両クラスとも4分の1前後選択されている。

③の「存じる」「存じ上げる」でも、いずれのクラスも規範として正解のcが過半数選択されているが、「存じる」にも「謙讓語Ⅰ」の用法を認めたaも両クラスとも3分の1以上選択されている。

いずれにしても、規範としては「参る」「申す」「存じる」はあくまでも謙讓語Ⅱ（丁重語）の動詞であり、動作の向かう人物に対する敬語としては謙讓語Ⅰの用法のみを持つ（謙讓語Ⅱの用法は持たない）「伺う」「申し上げる」「存じ上げる」を使用すべきとするのは良いが、「参る」「申す」「存じる」の謙讓語Ⅰとしての性格は現代語においても完全には否定しきれないのではあるまいか。

### 3-3 その他

#### 3-3-1 「申し出る」

問1⑦は複合動詞「申し出る」を問題とした質問である。前述のとおり、本答申では「申し出る」のなかの「申す」には「謙讓語Ⅱとしての働きは持っていないと言ってよい」としながらも、気になる場合には「「おっしゃってください」などと言い換えれば良い」と述べている。筆者としては、店員が客に対して「ご希望の方は申し出てください」などと使用するのには抵抗がある。

⑦	A	ア	15名 (20.3%)	B	ア	62名 (40.8%)
		イ	59名 (79.7%)		イ	89名 (58.6%)
					無回答	1名 (0.7%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

⑦は「店員が、お客さんに対して」という設定で、「ア 申し出てください」と「イ おっしゃってください」を比較したものであるが、Aクラスはイが圧倒的に多く、BクラスもAクラスほどの差はないもののイのほうが多かった。やはり「申し出る」からは謙讓語としての色彩が拭い去れていないのではないだろうか。ただし、今回のアンケートではアを選択肢を「お申し出ください」ではなく「申し出てください」としたため、「おっしゃってください」と比べて尊敬語としての敬意が低すぎるといった印象もあったかもしれない。

#### 3-3-2 「いただく」と「くださる」

前述のように、本答申では「御利用いただく」と「御利用くださる」を比較し、「どちらの言い方も適切に敬語が用いられているものである」としながらも、「謙讓

語 I の「御利用いただく」の使い方には、問題があると感じている人たちもいる」とも解説している。

問 2 ①はこの両形を比較したものである。

①	A	a	27名 (36.5%)	B	a	87名 (57.2%)
		b	15名 (20.3%)		b	20名 (13.2%)
		c	32名 (43.2%)		c	42名 (27.6%)
					無回答	3名 (2.0%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

Aクラスでは両形とも正しいとする c が過半数近くをしめたが、Bクラスでは「御利用いただく」が正しく「御利用くださる」が間違いとする a が過半数選択されるといふ意外な結果となった。Aクラスにおいても、bよりはaが多数選択され、「御利用くださる」よりは「御利用いただく」のほうが正しいと思っている回答者が多いことが明らかとなった。これは、現実に「御利用くださる」よりも「御利用いただく」を耳にする機会のほうが多いからかもしれない。

問 2 ②は、この形式がとくに違和感を与えると考えられるのは、「御利用いただく」自体に問題があるというよりも、「御利用いただけます」のように、可能の形で使用された場合なのではないかと考え、設問を設定したものである。

②	A	a	48名 (64.9%)	B	a	73名 (48.0%)
		b	8名 (10.8%)		b	19名 (12.5%)
		c	17名 (23.0%)		c	59名 (38.8%)
		無回答	1名 (1.4%)		無回答	1名 (0.7%)
		計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

しかし、回答の傾向はBクラスにおいては①と変わらず、Aクラスでは「御利用いただける」のみを正しいとする回答が3分の2近くを占めた。「御利用いただける」という表現が、理論的にはよく考えると若干抵抗が感じられる形にもかかわらず、もはや完全に定着しており、耳慣れているためであろうと思われる。

### 3-3-3 上司のことを上司に述べる

本答申では、「上司のことを、更にその上司に述べる（例えば、課員が課長のこと

を部長に述べる) ような場合は、次の①②の二通りの考え方ができる」として、その理由を次のように説明している。

- ① 部長から見れば、課長は、立てる対象とは認識されないであろうから、課長を立てずに述べるのがよいとする考え方
- ② 部長から見れば、課長は、立てる対象とは認識されないであろうが、課員が課長を立てれば、それによって更に上の部長を立てることもなるはずなので、課長を立ててよいとする考え方

問4は、この問題に関して場面を設定して質問したものである。

A	ア	18名 (24.3%)	B	ア	46名 (30.3%)
	イ	4名 (5.4%)		イ	15名 (9.9%)
	ウ	50名 (67.6%)		ウ	91名 (59.9%)
	無回答	2名 (2.7%)			
	計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

両クラスとも、①の立場を支持する回答が多かった。本答申では、「どちらの考え方にも、理があると言える。どちらを採るのがより適切かは、この三者（部長と課長と課員）の間の距離感や、状況などによっても変わってくると考えられる」としているが、たしかに会社の規模や形態によっても事情は異なり、結局は個々の会社の慣習に従うのがよいと思われる。筆者としては、同じ会社内ということを考えれば、少なくとも②でまったく問題ないとする。

### 3-4 「敬語の指針」

問5は「敬語の指針」を知っているか否かを尋ねたものである。

A	ア	7名 (9.5%)	B	ア	5名 (3.3%)
	イ	67名 (90.5%)		イ	147名 (96.7%)
	計	74名 (100%)		計	152名 (100%)

「ア 知っている」という回答はAクラスのほうが多いものの、全体としては現時点においてはほとんど知られていないと言わざるを得ない。

問6では、問5でアと答えた者に対して、その内容について記述を求めたが、「敬語の種類が従来の3つに加え、美化語と丁重語が追加され、5つに分類されるように



なった」「敬語の名称がいくつか変更したこと」「丁寧語が加えられた」「謙譲語の種類が増えた」のように敬語の分類についての記述にほぼ限られた。本答申が発表された折のテレビや新聞における報道も、敬語の5分類にのみ話題が集中したためであろう。

#### 4 おわりに

この二、三年、空前の日本語ブームといわれ、マスコミ等で日本語に関する問題が取り上げられる機会も多く、一般読者を対象とした日本語を題材とする書籍も多数出版されている。日本語に関するテーマのなかでも敬語に関する諸問題はとくに関心の高いもののひとつである。

しかしながら、平均的な国民にとっての敬語の認識はまだまだ貧弱な状態であるといえよう。前述のように、敬語の種類についても文字面から「謙譲語」を「話し手が遜る言葉」、「丁寧語」を「丁寧な言葉遣い」のように理解し、「尊敬語」だけが「敬語」であるくらいにしか認識していないようなケースさえ珍しくないように思われる。また、個別の問題に関するある程度の知識はあっても、日本語の敬語に対する体系的な理解に基づいて、正しく敬語を使いこなすのは至難の業である。たとえば、留学生の場合に、上級レベルであっても、時として誤る助詞の選択など、日本語の母語話者であれば絶対に間違わないが、こと敬語に関する問題となると、日本語の母語話者であっても上級レベルの留学生と同じレベルの間違いを犯す場合も珍しくないように思う。今回のアンケート調査の分析結果からも、とくにBクラスの回答者のなかには敬語に関する基本的な知識と理解が不足しているケースが少なくないように思われた。

こうした状況において、「学校教育や社会教育での敬語の学習や指導」「地域・職場・家庭など様々な社会生活での敬語使用等」の「よりどころ」の基盤として「敬語の指針」が発表されたことの意義は非常に大きい。ただ、広い層の読者を想定して記述されているため、たとえば歴史的な背景や敬意のレベルの問題などの点でより踏み込んだ専門的で詳しい解説が欲しいと感じられる箇所もみられる。できれば、こうした点を、今後、別冊のような形で補足してもらえるとさらによいように思う。

#### [参考文献]

- 『敬語の指針』（2007）文化庁HP（<http://www.bunka.go.jp/index.html>）
- 『日本国語大辞典 第二版』（2000～2002）小学館
- 『新選国語辞典 第八版』（2002）小学館
- 『新明解国語辞典 第六版』（2005）三省堂

[別添資料]

敬語に関するアンケート

A

問1 次の①～⑦のそれぞれについて、もっとも適当と思うものの記号に○を付けてください。

- ① ア 部長は何を召し上がりますか？  
イ 部長は何をお召し上がりになりますか？  
ウ 部長は何をお召し上がりになられますか？
- ② ア お客さまが見えました。  
イ お客さまがお見えになりました。  
ウ お客さまがお見えになられました。
- ③ ア 社長はウールのセーターを召している。  
イ 社長はウールのセーターをお召しになっている。  
ウ 社長はウールのセーターをお召しになられている。
- ④ ア 明日の午後、お宅へ伺います。  
イ 明日の午後、お宅へお伺いします。  
ウ 明日の午後、お宅へお伺いいたします。  
エ 明日の午後、お宅へお伺い申し上げます。
- ⑤ ア 社長はいつも英語の本を読んでいらっしゃる。  
イ 社長はいつも英語の本をお読みにいらっしゃいます。  
ウ 社長はいつも英語の本をお読みになっています。
- ⑥ ア 先生がテキストを読んでくださった。  
イ 先生がテキストをお読みにしてください。  
ウ 先生がテキストをお読みにしてください。
- ⑦ (店員が、お客さんに対して)  
ア ご希望の方は係の者に申し出てください。  
イ ご希望の方は係の者におっしゃってください。

問2 次の①～②に使用されている敬語に対する a～c の説明として、それぞれもっとも適当なものの記号に○を付けてください。

- ① ア いつも当店をご利用いただきまして、ありがとうございます。  
イ いつも当店をご利用くださりまして、ありがとうございます。
- a アは正しいがイは誤り      b イは正しいがアは誤り      c アもイも正しい
- ② ア 当店はお一人でもお気軽にご利用いただけます。  
イ 当店はお一人でもお気軽にご利用になれます。
- a アは正しいがイは誤り      b イは正しいがアは誤り      c アもイも正しい

問3 次の①～③に対する a～c の説明として、それぞれもっとも適当なものの記号に○を付けてください。

① (生徒が田中先生が同席していない場所で、鈴木先生に対して)

- ア 明日、田中先生のお宅に伺います。
- イ 明日、田中先生のお宅に参ります。

- a 田中先生に対する敬意がアにもイにもある
- b 田中先生に対する敬意がアにはあるがイにはない
- c 田中先生に対する敬意がイにはあるがアにはない

② (係長である話し手が課長が同席していない場所で、部長に対して)

- ア 課長には私がそのように申し上げます。
- イ 課長には私がそのように申します。

- a 課長に対する敬意がアにもイにもある
- b 課長に対する敬意がアにはあるがイにはない
- c 課長に対する敬意がイにはあるがアにはない

③ (課長である話し手が社長の同席していない場所で、部長に対して)

- ア 私は、社長の奥様は存じません。
- イ 私は、社長の奥様は存じ上げません。

- a 社長の奥様に対する敬意がアにもイにもある
- b 社長の奥様に対する敬意がアにはあるがイにはない
- c 社長の奥様に対する敬意がイにはあるがアにはない

問4 係長である話し手が、課長と一緒に部長室に行った場合における、部長に対しての発言として適切と思うものの記号に○を付けてください。

- ア 課長は、いつもこのようにおっしゃっています。
- イ 課長は、いつもこのように言っています。
- ウ 課長は、いつもこのように申しております。

B

問5 あなたは平成19年2月に文化審議会答申として発表された「敬語の指針」を知っていますか。

- ア 知っている。
- イ 知らない。

問6 問5でアと答えた人は、その内容について知っていることがあれば記述してください。

学部 ( ) 学年 ( ) 性別 ( ) 出身地 ( )